

没(meī)について(補説)

中村雅之

1. はじめに

本誌15号に「没(meī)の成立について」と題する拙文を載せたが、その後、19世紀後半の朝鮮資料の中にいくつか興味深い事例のあることに気づいた。すなわち、『你呢貴姓』と『華音撮要』という二つの資料に「没有」の口語音の音形がハングル文字で示されており、当時の漢語の音形を考える上で極めて重要である。とはいえ、それらの資料はすでにある程度の研究がなされた資料であり、資料それ自体の記述については私が新たに加えることはない。また、『華音撮要』は未見である。それにも関わらず本稿をなすのは、「没(meī)」という基本語彙について、その音形がどのようにして成立したかということがまだ十分には明らかになっていないと思われるからであり、二つの朝鮮資料はこの観点から再検討すべき価値があると考えるからである。

2. 「没(meī)」研究簡史

まず、これまでに「没(meī)」という音形に関してなされた考察を確認しておくが、実のところ「研究史」というほど多くの研究があるわけではない。

T.F.Wadelは『清語階梯語言自邇集』(1880頃)において、「meī」の音形を「a corruption of mo yu」と説明した。

太田辰夫(1957:100頁)は「没」について以下のように記した。

没。がんらい「陷没」「埋没」の意であるが、唐代には「無」の意味として多く用いられた。これが「没有」となったのはおそらく元代で、宋代にある「無有」の変化したものであろう。「没」「没有」とも元代では動詞を否定することはなく、明代以後に動詞を否定するようになった。「没」[meī]の[i]は入声韻尾には関係なく、「没有」という語が普遍的になってから「有」[iu]の[i]の影響でできたものか。

最後の部分は卓見といえるが、仮定にとどまり、具体的な例証は提出されなかった。

吉池孝一(1994)は、の記述ならびに『清語階梯語言自邇集』「言語例略」の例文を詳細に検討し、「没有」に対して「mo yu / mê yu」、単独の「没」に対して「mêi / meī」と記されていることから、「moyu(>mêyu)>meī」という変化によって「meī」の音形が形成されたと論じた。

以上の記述・研究によって、「没」の現代音「meī」は「没有」という2音節語から生じたものであることがほぼ確認できるのであるが、細部についてはなお検討を要する点が多い。例えば、前稿に述べたように、清朝における「没」の官話音としては「mu」が一般的な音形であった。「mo」は北京に特徴的な音形である。「meī」ははたして「moyu」からのみ生じたのか、あるいは「muyu」からも生じたのか。そしていずれの場合にも、具体的にはどのような順序で変化したのか、等々。それらを考えるためにも、より多くの事例を集めることが必

要となる。

3. 『你呢貴姓』における「没有」

この資料については福田和展(1995a、1995b、1997)に詳しい考察がある。それらによれば、編者未詳のこの写本は現在韓国精神文化研究院に蔵され、一説に高宗年間(1864-1906)のものという。中心部分は現在の遼寧省鳳城付近を舞台とする商業用の漢語会話文で、漢字本文の各行の左側に朝鮮語訳、右側に漢語の口語音を記したと思われるハングル注音が付されている。(以下において、ハングルは河野式転写で記すことにする。)

会話文の中には「没有」の語がしばしば現れるが、右側のハングル注音ではほとんどの場合「mui 'iu」と表記されている。ほかに「myi 'iu」(yは[w])が2例、「mui 'i」が1例見える。単独の「没」は見えない。

「mui 'iu」の「mui」は[mui] ~ [muəi]を表わすと考えて大過ないであろう。「myi」は「毎」の表記にも用いられているから、[mei]と考えるとよい。「mui 'i」については後述する。要するにこの資料では、「没有」の音形として、前述の『清語階梯語言自邇集』『言語例略』には見えなかった「mui 'iu」が最も優勢な形式として記されているのである。

4. 『華音撮要』における「没有」

この資料については未見である。詳細な研究が公表されているかどうかも寡聞にして知らない。ここでは、更科慎一(1998)によって述べることにする。

東京大学文学部小倉文庫蔵の写本で、1877年のもの。(前段)、(中段)、(後段)に分けられる。は会話文で右側にハングルの注音を伴う。も会話文だが注音なし。は慣用句・単語などで、ハングル注音と朝鮮語訳を伴う。内容的にも形式的にも『你呢貴姓』によく似るといえる。注音部分は と で体系がやや異なる。

「没有」については の部分では「mu 'i」「me 'ie」(eは[ə] ~ [ɔ])「mu 'iu」があり、このうち「mu 'i」が最も多い。 の部分では「mu 'iu」。

と の「mu 'iu」の形式は満漢資料にも見え、清朝における最も普通の音形と言ってよい。 の「me 'ie」はおそらく[mɔ iɔ]のような音を表わすのであろう。「mu 'iu」の弱化した形式か、あるいは『清語階梯語言自邇集』『言語例略』に見える「moyu」に近いものか。

問題は で最も優勢な「mu 'i」である。通常の子音の概念からすれば、非常に奇異に感じられるが、私はこれを第2音節が弱化して1音節になりつつある(もしくは、なった)形式と考える。具体的には[mui]を表わすものではないか。更科(1998)によれば の言語は、児化音を精密に記す(ex. 昨兒个 jorge)など、口語音を細部にわたって表記しようとしている。したがって頻出する「mu 'i」を単なる誤写と見なすべきではなからう。その表記を虚心に見つめるならば、[mu:i]ないしそれに近い音声を表記しようとしているように思われる。『你呢貴姓』に1例だけ見えた「mui 'i」も同様のものではあるまいか。ただし、福田(1995b)ではこの箇所を「mui 'iu」と記している(121頁下段1行目)。私のコピーでは「mui 'i」と見えるが、あるいはコピーが不鮮明なために「mui 'i」に見えているだけという可能

性も皆無とは言えない。『華音撮要』の表記を参照するならば、『你呢貴姓』に「mui 'i」という表記があったとしても、それほど奇異ではないことだけを加えておく。

5. まとめ

前稿では、『清語階梯語言自邇集』『言語例略』に「meiyu」の表記が見られないことから、「moyu」が「meiyu」の段階を経過することなしに、第2音節の弱化によって「mei」に変化したのではないかと想定したが、今回用いた『你呢貴姓』には正に「meiyu」に相当すると言える「mui 'iu」が確認された。また、『華音撮要』の部分では、「没有」が1音節化しつつある段階を示すものと疑われる「mui 'i」が記されていることも（間接的ながら）確認された。

朝鮮資料の表わす音形は北京音ではないが、北方の一地域における「没mei」の成立に関する資料が追加されたことの意味は大きい。少なくとも『你呢貴姓』によって「mu iu」から「mui iu」へと変化した段階があったことが資料で裏付けられたのである。ここにおいて太田(1957)の仮定が具体的な例証を得たことになる。

朝鮮資料の恩恵は大きい、「没mei」に関する細部の考証のためにはなお多くの資料が必要である。

<参考文献>

- 太田辰夫(1957)「中国語法発達史」『中国語比較研究』中国語学研究会編、江南書院。
- 更科慎一(1998)「華音撮要について」(第12回対音対訳資料研究会における発表用レジュメ。1998年9月13日、於愛知県立大学)
- 中村雅之(2004)「没(meい)の成立について」『KOTONOHA』第15号、古代文字資料館。
- 福田和展(1995a)「《你呢貴姓》の言語に関する初歩的分析」『語学教育論叢』第12号、大東文化大学語学教育研究所。
- 福田和展(1995b)「《你呢貴姓》翻字」『中国語学研究 開篇』vol.13
- 福田和展(1997)「《你呢貴姓》の言語に関する初歩的分析その2 校注」『語学教育論叢』第14号、大東文化大学語学研究所。
- 吉池孝一(1994)「没meiの発音について」『語学漫歩』18号、東京都立大学語学懇談会。